風の剥製・伍

根岸一之

わが畏友古山正雄氏にこの句集を献ず

寺山修司はどこかで、俳句は滅びゆく文藝であるという意味のことを書いている。なぜ寺山が一時的にではあるものの、俳句に熱中したかの弁明のような文章であった。しかし、それはともかく、その寺山一流の「滅びの美学」に魅せられて、すでにほぼ三十年が経過した。そして、俳句に深く関わるにしたがって、日本語という言語の戦慄すべき「魔術的」性能に気づかされたりもした。

ここら辺りで、数冊の私家版の句集に纏めておこうと思いついたのは、ごく最近のことである。現実世界に眼を移せば、当たり前に出版できたとしても、そのような「滅びゆく文藝」には、多数の読者を獲得出来る術もない。とすれば、何時か誰かが発掘するまでの数百年を、電脳の海にしずめておくべしと決意し、ここにそれを行う。

幻聴の諧謔

序：幻聴の逆説（あるいは結晶）

幻聴という確かなる証言を、何処かの深淵の底へと沈めたいという思い。前世の記憶を、時に未来を記憶する不敵な眼差し。この俳人は、ある時はマラルメの絶対零度の氷のごとき詩句を拾い、ある時はミス・ブランチなる薔薇を封じた透明な椅子に腰掛けて、ホラー映画の惨劇を愛づることができる冷徹な網で、見えぬ「たましひ」をひたすら狩り続けてきた。

陰画の舟が運ぶのはデカルトの論理が消し去った海市か、老嬢の耳朶に震える秋の風か。この句集に編まれた七十二句は、この虚無なる宇宙に刻まれた「生」の震動である。産まれて生きて死すばかりの生命の、その一瞬に響くワルツの調べをここに清記する。

目次

陰畫の舟に積む ——07
銀河を割る ——17
福音の證明 ——27
マラルメの海峡 ——37
記憶の匂ひ ——47
數億の夏 ——57
風の供物 ——67
毒食めばワルツ ——77

陰畫の舟に積む

海といふ香焚く一日（ひとひ）ランボォ忌

冷酒やしみじみ聴けば八代亜紀

霜柱一行の謎彳（た）ちにけり

遁走の睦月をゆけり此處よりは

音も無く廻れ木馬よ去年今年

鶴と亀すべりし夜の謀り事

我すでに他者かも知れず小夜時雨

凍蝶や翅の奥処（おくか）に夢を食む

陰畫にて舟みるごとき夕立(ゆだち)かな

銀河を割る

福壽草きつと前世で見し黄色

濡れてゐる坂の果てなる涅槃西風（ねはんにし）

夜の雪や名もなき驛を默殺し

斃れざま極楽みたり雪景色

寒卵垂直水平異常なし

冬銀河ときに未來を記憶せよ

木枯しは一方向に吹いてゐる

枯野には朝陽届かぬ場所もあり

薄氷（うすらひ）を割る悦楽も絶望も

まぼろしの半旗

日は落ちて地中へ還る秋の蟬

福音やレースの胸に薔薇の翳

春宵やパズルの桝は白く暮れ

勿忘草（わすれなぐさ）少女心中するごとく

銀器もて苺のあたま潰しけり

デカルトの證明ありて海市消ゆ

皐月晴まぼろしの旗半旗にて

武者人形の横顔凛々し兄は無し

いまは亡き黒き外套消えて闇

マラルメの海峡

夜半更けて猫長くなる春炬燵

賢人になりたくもなし四月馬鹿

蜃氣樓戀はゲームと覺へけり

朧夜や二次元の繪へ懸想する

眞夜の湯に蟻の二匹の溺死かな

煉獄へ黒き揚羽の足掻く音

春まだき悪夢を研ぎて鏡とし

マラルメの氷面（ひも）なる詩句の溶けざるを

冬衛忌の海峡青く潰えたり

記憶の匂ひ

夜想曲（ノクターン）一音にして秋の風

むしのねや默（しじま）に銀のひとしづく

東山魁夷のごとく秋木立

金木犀記憶の果てを金に染む

ショウウインドウ

飾り窓の無数の空を鳥渡る

夜半過ぎて満月のみを積む列車

老嬢の耳朶の薄さよ薄紅葉

秋の日やセガンティーニの死の光

幻聴にあらがふ獨り秋祭

數億の夏

古代魚の眼に數億の夏眠る

夏雲のむかうにはるか少年期

廃藺や未遂の色を罌粟の花

白薔薇や曠野へ曝すポオの骨

満月を抱きて詐欺師の眠るかな

暑き夜や惨劇（ホラァ）を愛づる繻子の椅子

夏館（なつやかた）聖域を編み籐の椅子

永劫の闇を契（ちぎ）るや流れ星

黙契のごとく春月南中す

風の供物

球體に秋風供ふ無名の碑

黒薔薇や忘れちまつた花言葉

睦言や枕邊に活(い)く寒牡丹

曼珠沙華花瓣重ねて蔭を飼ふ

裏庭に音無く秋の散りにけり

未練とは火鉢の隅に残る熾

漆黒の夢なら夢と梅月夜

探偵の解かぬ謎あり冬籠

神無月ゴドーを待てる影に影

毒食(は)めばワルツ

雨音のワルツを廻す梅雨入(つゆいり)かな

眉目麗しき一脚の倚子

餘花散るやミス・ブランチの白髪に

稲妻やあぶなゑの端（は）に猪口ふたつ

消ゆる火に戀弔（とむら）はる大文字

憂鬱を寝酒に混ぜる櫻桃忌

螢狩死者のたましひ狩るごとく

斑猫（はんめう）やさきへさきへと影法師

惑星に病葉（わくらば）墜ちる音を聴く

蜉蝣や産まれて生きて死すばかり